2025年4月20日　説教「復活の主の食事」

ヨハネの福音書21章1～14節

本日はイースターの礼拝です。金曜日に十字架上で息を引き取られた主は、墓に葬られました。そして、三日目の日曜日の朝に、復活されました。女たち、弟子たちなどに、復活の主は現れてくださいました。今朝の聖書箇所はこの福音書だけにある復活記事です。

１．テベリヤ湖畔に現れた復活の主（1～3）

①テベリヤ湖畔で（1）**「この後、イエスはテベリヤ湖畔で、もう一度ご自分を弟子たちに現された。その現された次第はこうであった。**

テベリヤ湖というのはガリラヤ湖のことです。この場所において、復活の主は再び現れてくださいました。今回の出来事の次第が、以下に伝えられていきます。

②そこにいた弟子たち（2）**「シモン・ペテロ、デドモと呼ばれるトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子たち、ほかにふたりの弟子がいた。」**

そこにいた弟子たちの名前がここにあります。シモン・ペテロ、最初は復活の主を疑っていた通称デドモのトマス、ガリラヤ湖から西に20キロ程の所にあるカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子ヤコブとヨハネ、その他に二人の弟子たちがそこに連なっていました。

③漁に行った弟子たち（3）**「シモン・ペテロが彼ら言った。『私は漁に行く』。彼らは言った。『私たちもいっしょに行きましょう』。彼らは出かけて、小舟に乗り込んだ。しかし、その夜は何もとれなかった。」**

さて、弟子達のリーダー格のペテロが漁に行くことを、周りに伝えました。復活の主に出会い、新たなる信仰の力を与えられていたペテロはその時でも、時間があれば漁に出ていたようです。元々漁師であったヤコブやヨハネは行動を共にすることは自然でしたが、そこにいた弟子たちも同行することになり小舟に乗りました。ところが、その夜は全くの不漁でした。

２．海上での出来事（4～8節）

①岸辺に立たれたイエス（4～5）**「夜が明けそめたとき、イエスは岸べに立たれた。けれども弟子たちには、それがイエスであることがわからなかった。イエスは彼らに言われた。『子どもたちよ。食べる物がありませんね。』彼らは答えた。『はい。ありません。』」**

夜が明けようとしていました。そのとき、復活のイエスが現れ、岸に立たれたのです。弟子たちは少し離れた海上にいて、その方がイエスであるとわかりませんでした。そういえば、エマオに向かう二人が、復活の主が話しに加わった時も、彼らの目はさえぎられてイエスだとわからないということがありました（ルカ24章）。復活のイエスは、食べ物がありませんね、訪ねました。彼らはありのまま「ありません」と答えました。

②舟の右側に網をおろせ（6～7）**「イエスは彼らに言われた。『舟の右側に網をおろしなさい。そうすれば、とれます。』そこで、彼らは網をお**

ろした。すると、おびただしい魚のために、網を引き上げることができなかった。そこで、イエスの愛されたあの弟子がペテロに言った。『主です。』すると、シモン・ペテロは、主であると聞いて、裸であったので、上着をまとって、湖に飛び込んだ。

そこで、イエスは舟の右側に網をおろすことを命ぜられるのです。すると、おびただしい魚が網にかかったのです。その時、ヨハネ（イエスの愛された弟子）が、約束の言葉を言われたのが主であるとわかり、それをペテロに告げました。すると、ペテロはためらわず、上着をまとって、湖に飛び込み、岸に向かって泳ぎ始めたのです。

③ほかの弟子たちは（8）**「しかし、ほかの弟子たちは、魚の満ちたその網を引いて、小舟でやって来た。陸地から遠くなく、百メートル足らずの距離だったからである。」**

ほかの弟子たちの大漁の魚のこともありますから、小舟をこいて陸地に向かったのです。陸地からは 100 メートル弱で、それほど慌てる必要もなかったからです。

３．陸に戻り、朝の食事（9～14 節）

①炭火と魚とパン（9～10）**「こうして彼らが陸地に上ったとき、そこに炭火とその上に載せた魚と、パンがあるのを見た。イエスは彼らに言われた。『あなたがたの今とった魚を幾匹か持って来なさい。』」**

弟子たちが陸にあがると、なんとそこには炭火がおこしてあり、その上には魚とパンがのっていました。復活のイエスがそれをなされたのでしょうか。その上で、取ってきた魚を炭火の上に乗せるように言われました。

②153 匹の大きな魚（11～12）**「シモン・ペテロは舟に上がって、網を陸地に引き上げた。それは百五十三匹の大きな魚でいっぱいであった。それほど多かったけれども、網は破れなかった。イエスは彼らに言われた。『さあ来て、朝の食事をしなさい』。弟子たちは主であることを知っていたので、だれも、『あなたはどなたですか』とあえて尋ねる者はいなかった。」**

ペテロは網を陸地にあげましが、数えてみると中には大きな魚が 153 匹もありました。イエスは「さあ、食事をしなさい」と言われましたが、この時には誰も復活の主を疑わずに、当然のように受け止めていました。

③パンと魚を与えたイエス（13～14）**「イエスは来て、パンを取り、彼らにお与えになった。また魚も同じようにされた。イエスが、死人の中からよみがえってから、弟子たちにご自分を現わされたのは、すでにこれで三度目である。」**

イエスは、パンを取って、彼らに与え、魚も同じようにされました。五千人給食の時にも呼応する出来事でした。復活の主はここにあるように弟子たちには三度目でしたが、女たちや 500 人以上の人々の前で同時に現れもしました（Ｉコリント 15:6）。

《結論》 復活節の朝。今朝の聖書箇所から三つのことを学びます。

第一は、4 節において、弟子たちは最初誰であるのかわからなかったのに、12 節では弟子たちは復活の主だと知っていたとある点についてです。4 節の時点でわからなかったのは、ただ単に遠くだったからでしょうか。いいえ、その時点で弟子たちはイエスと会話しているのです。「食物がありませんね」。この質問に弟子たちは「はい。」と答えています。それなのに、イエスだとわからなかったのは、霊的眼（まなこ）が曇っていたからです。しかし、主の言われるように網をおろして、大漁を得たときに、ヨハネが「主です」と言って、気がつきました。その時に霊的眼が開けられたのです。既に復活の主に二度も出会っていましたが、なかなか弟子たちは復活が認識できなかったのです。しかし、12 節に至るといつの間にか復活の主を認めているというところが不思議です。これは、私たちの復活信仰にもあてはまります。復活信仰は主の恵みにより霊的眼が開かれることによります。復活への信仰が深まり、ますます開かれて行くよう祈りましょう。

第二に、復活の主の言われるままに網をおろした時に、153 匹もの魚が網にかかったことについてです。復活の主は私たちに恵みよって、具体的な実りを備えてくださるということです。漁の専門家であるペテロやヤコブやヨハネがいても一匹も取れなかったのに、復活の主の言われる通りにすると大漁だったのです。私たちの宣教や仕事などの実りは、私たちの努力や勤労によるという面があることは確かです。しかし、最も根本的に言うと、虫が良いようですが、復活の主の恵みがあればこそなのです。その恵みに与れるよう、復活の主にすがり、その命ざれるままに行っていきましょう。

第三に、復活の主が弟子たちに食事を与えられたことについてです。漁から戻ってきた弟子たちに、復活の主イエスは朝の食事の準備をし、それを備えてくださいました。そして、パンと魚をとって、弟子たちに与えられました。それは、5000 人給食の出来事や聖餐式にも通ずることでした。この時に、弟子たちは食事にあずかるわけですが、復活の主はこの時に食事をされなかったのでしょうか。それは明確には記されていません。しかし、私は弟子たちと一緒に、食事をされたと理解しています。椎名麟三（1911～73）というクリスチャンになった小説家がいます。彼はルカの福音書の復活の記事を読むうちに、「突然気がつけば、その灯がそこにあった」（「信仰について」より）と述べています。また、「私の聖書物語」という本のなかでは、復活の主がむしゃむしゃと焼き魚を食べている様子に心動かされたとも述べています。復活の主は、からだをもって復活されたのです。

今年もこの復活節を迎えて、私たちもこの復活の恵みにあずかっていきたいものです。それではどうすれば良いのでしょう。私はこの椎名麟三の道筋が現実的だと思います。聖書を読んでいくなかに、主は復活の信仰へと導いてくださるのです。キリストを信じるというのは、キリストの十字架と復活の信仰が土台です。どん底にある人々、苦しむ人々にとっても福音は力です。復活の恵みが豊かにありますように。